



TITLE:

滿洲の氣候

AUTHOR(S):

水野, 千里

CITATION:

水野, 千里. 滿洲の氣候. 天界 1933, 13(143): 93-100

ISSUE DATE:

1933-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162326>

RIGHT:



満 洲 の 気 候

水 野 千 里

ま へ が き

満洲事變高潮の際、私の體驗から満洲の氣候に就いて述べることは有意義の事と考へる。思ひ起せば明治37年2月4日廟議日露開戦に決定し、翌5日國交斷絶、6日には佐世保軍港に待機中の東郷聯合艦隊は舩 艦街んで發航、征途に上り、2月8日には仁川旅順に於て敵艦隊を攻撃し、2月10日宣戦の大詔が煥發されたのである。それから黒木軍は仁川、鎮南浦に上陸し、鴨綠江に向つて前進した。私は6月7日姫路後備歩兵第10聯隊要員として充員召集令狀に接し、欣喜雀躍して應召、6月14日入隊、6月24日姫路出發征露の途につき、東二見村に1泊、翌25日神戸に到着、諸準備を整へ、27日尾 丸しやかのなまるに乗船、官民多數の見送りを受け正午出船、7月3日大孤山沖に投錨、先發となつて南尖子に上陸、9日岫巖に達し、その附近に19日迄滞在、30日柞木城攻撃に参加し、初めて彈丸雨飛の許に馳驅し、8月12日海城に進軍、8月26日から遼陽の戦鬪に加はり、9月11日第4軍司令部附に轉じ、10月8日から沙河會戦に參與、10月14日三塊石山の北麓大勾に着き、明治38年2月末日迄滞陣、3月1日から奉天大會戦に參與、6月9日開原城北の城後に滞陣、10月16日平和克復、後備隊から凱旋を開始し、第4軍司令部は半ヶ年以上も居た城後を後に、明治39年1月4日鐵嶺に向ひ歸途に就き、7日鐵嶺から乗車、9日大連に到着、翌10日安藝丸に乗船13日宇品に安着、上陸して廣島に1泊、翌14日細野參謀に従ひ先發となり、なつかしき岡山で老母、其の他の人々の出迎へを受け、神戸からは1,2等特急に乘換へ1月15日東京に凱旋、弟共に迎へられ、參謀本部に到りそれから陸軍戸山學校で事務を執り、23日復員完結し、召集解除せられ、29日夜東京出發、30日京都に立寄り、31日岡山に歸つた。

満洲にあつたこと1ヶ年有餘、其の間に體驗したところの氣候に就いて述べ、讀者諸君の御參考の一助としたいのである。しかし手許にある參考書が

少いので、適當の比較が出来ない點もあることを許して戴きたい。

奉天は東經123度23分北緯41度48分、高さ43.8米。これを我が國に比較するのに函館は東經140度43分、北緯41度47分、高さ4米、緯度が似通つて居るが、奉天の大陸性氣候に對し、函館の海洋性氣候では比較が面白くないので、旭川の方が適當だと思ふ。

旭川は東經142度22分、北緯43度47分、高さ113.2米である。

大連は東經121度38分、北緯38度54分、高さ97.3米、山形は東經140度21分、北緯38度15分、高さ155.4米。大連は海岸にありながら海洋の影響を受けることが少いから、海岸から少々隔つて居る山形と比較する。次に我が岡山は東經133度56分、北緯34度40分、高さ6.1米にある。

今奉天と旭川、大連と山形それに岡山とを比較することにする。

1. 7月——各地の天候比較

7月3日大孤山の一角、南尖子に上陸して、幕營の位置を定め、海岸で本隊の上陸するのを待つて居た。宵には諸所に篝火が焚かれて居たが、夜の更くるに連れ、火は次第に衰へ、夜風身にしみ、本隊の上陸を今か今かと待つて居たが、風加はり波の音が高くなる計りで、一向に本隊は來ない。内地ならば梅雨上りで暑さが相當に酷しい時であるが、滿洲では肌寒く、それに雨がボツリボツリと降つて來たので、それに濡れながら一睡もせず夜を明した。夕食を與へられなかつたので、腹は減るし一層寒さを感じた。これが亞細亞大陸に上陸した最初の日の天候であつた。翌4日本隊は上陸した。昨夜沖の方は風浪高く、それに夜になつたので、上陸は取止めとなつたのださうな。それから9日には岫巖に達した。晝は暑かつたが夜の幕營は涼し過ぎる位であつた。

30日から橋本城の戦闘に加はり、8月1日に終つたが、晝は暑さ殊の外甚だしく、攝氏50度以上(華氏120餘度)に達した。

7月平均氣溫大連23.5度、山形23.0度、奉天24.7度、旭川19.6度、岡山25.8度である。

氣溫毎日最高の平均大連 27.2度，山形28.4度，奉天30.3度，旭川25.8度，岡山30度．氣溫毎日最低の平均大連 20.6度，山形18.4度，奉天20.1度，旭川14.2度，岡山22.1度である．

雨には餘り惱まされなかつた．平均降水日數大連11.0日，山形15.1日，奉天14.8日，旭川13.8日，岡山 11.6日．降水量でいへば大連 162.3耗，山形136.3耗奉天162.4耗，岡山137.5耗である．

2. 8月——滿洲の雨期

8月は滿洲の雨季である．度々雨に逢つて困つた．外套を着ても雨が透るので，後には外套を着なくなつた．濡れたら濡れたなり．丁度服を着て水中に飛び込んだと同様になるが，誰れも服を脱いで搾るものもなく，着干しにする．それに川が多くても橋がない．

徒渉するので，1日數回もズボンが濡れる．實にいやなのは滿洲の雨季である．一度驟雨があると，河川には濁水が漲る．これは山に樹木がないからである．或る時歩哨が河の對岸に出て居たときに，大雨沛然として到り，交代の時が來ても徒渉することが出来ない様になつたことがある．雨が霽れて暫くすると，河水が減じたので，ヤット歩哨の交代が行はれたことがあつた．12日から16日迄海城に滞陣して居たが，殆んど毎日の様に雨が降つて，輜重が續かない．それで遼陽攻撃が延期された．26日邦石堡子を出發して遼陽攻撃に移つたが，又雨が降り出して，27日は大雨の中で戰鬪が交へられた．「東郷日和」に「大山雨」といふことが何處からか唱へられ出した．事ある時に海軍は日和で陸軍の方は雨が多かつたからである．28日から天候恢復攻撃が進捗した．

晝は暑い雨が降ると夜中には寒さを感じるのである．下士以下はさうは行かないが將校中には年中冬のズボンをはいて居た人もあつた．滿洲人は雨の降る時には綿入れを着て居るものもあつた．

8月の降水日數及び降水總量は次の通りである．

地 名	降水日數 日	降水總量 ミリ
大 連	9.9	130.3
山 形	13.4	144.3
奉 天	12.1	151.4
旭 川	13.6	122.1
岡 山	8.9	92.6

3. 9月——満洲の秋

9月3日夜遼陽の諸所に火災が起つた。これは露兵が退却に當つて糧秣等の倉庫に火をつけたからである。又各所に大爆發があつた。これは地雷火である。3日夕刻私等の居た第1線の前方數10米のところの地雷が爆發されたときには冷りとした。今少し前進して居たならばこの地雷にかゝつておさらばであつたのである。夜半月光皎々として戦死者が右にも左にもあるのを照して居る物凄。時に10數日來連續して居た銃砲聲も絶えしとし氣味悪い中に喇叭の音が響き渡り、何んともいへない感に打たれた。これは露軍が總退却を行つたので打方止めの號音であつた。實に悲壯なものである。散兵線の儘で夜を徹し夜明前に非常に寒さを覚え。夜が明けて見ると地上には霜を結んで居た。内地では未だ未だ暑い時であるのに早や満洲には秋が訪づれて來た。恐るべき冬の寒さが近づいたのである。一旦遼陽の南方チンジャートウンに引揚げた。中にはこの戦鬪で休戦になるのぢやといふものもあり、或る峠を南に越えるとき、よく遼陽を見て置きなさい、再び見ることは出來ないといつたものがあつたが、遼陽戦直後に賜はつたところの勅語の中には『前途遼遠』の句がある。（大戦鬪後の勅語には常に『前途遼遠』の文字がある。）これは出征將卒をして氣分を緩めさせぬ様にとの大御心と拜察するのである。志氣が沮喪しては戦には勝てぬ。遼陽戦鬪中一夜或る兵が『敵は未だ逃げぬ頑強に抵抗する』と言つて居たのを聞いた私はこれでこそ我が軍は強いのであると、しみじみ感じた。敵は弱い者、逃げるものと定めて居る元氣があるので常に勝利を得るのである。さりとて決して油斷してはならない。餘り話がそれたが、そのついでに遼陽戦鬪中に起つたナンセンス！ 或る夜敵襲と叫んだものがあつたので、人々はガバと起き、又銃線に集つたが、敵は來ない。不思議に思つてよくよくその原因を正したところ、何んぞ計らんやだ。一兵の寢言であつたので一同口あんぐり。

この戦に將校の戦死が多かつたので、將校の連絡斥候を出すべきところを一下士の私に命令が下つた。私は聯隊長の命によつて高塚上等兵以下五名を引率して、太子河の鐵橋附近に進み、對岸に守備して居た露兵の狙撃を受け

た時には、これはヤラレタなと思つたが、引率者は沈着が第1だ。あわてゝ兵卒に負傷させてはならないと考へ、指名して1人宛を安全のところへ後退させ、私は最後に引揚げ一同無事なことを得た。道を變じて再び進みその目的を達して歸途につき、出發點に歸つて見ると隊は居ない。幾ら探しても探し當てないので、遼陽の1民家に宿つたが、夜南京虫に攻めたてられ大閉口、5日朝大雨が降つた。よく大戦闘の後には雨が降るといふが、その通りに降つたが、暫時にして止んだ。それから尋ね尋ねて漸く原隊の宿營地に辿りつき、聯隊長に報告して面目を施した。その後9月中は晴天又晴天。

4. 10月から翌年3月迄——滿洲の冬

この半ケ年間は滿洲の冬である。10月に入つてクロバトキンは増援隊を多數に得たので奉天から南下して、遼陽を奪還せんと企てた。遼陽戦後1ヶ月間銳氣を養ひ、戦死傷者の補充をなし、時は天高く氣澄み脾肉の嘆を漏して居た折柄、何んぞ敵の來るを待たんやだ。直ちに之れを邀撃するに決し、大山總司令官は全軍に攻撃命令を下された。將卒は意氣天を衝くの概を以て前進し、沙河附近の遭遇戦は開始された。抑々日露戦争は殆んど敵の防禦せる陣地に向つて我が軍が之れを攻撃したので、大部隊の遭遇戦は得利寺の戦と、この沙河戦丈けである。

9月11日から1ヶ月有餘、第4軍司令部は遼陽の南方東八里庄で奇策をめぐらして居たが、10月8日猛然として起ち、敵を撃破せんとて羅大臺に向つて前進した。この日寒氣強く晝食の際水筒を傾けたが、水が出ない、慥に朝水筒に水を入れたのに、逆にしても1滴水の水も出て來ない。そこで、よく見れば水が凍つて居たのである。これには驚いた。内地では10月の初めは年中の好時節であるのに、滿洲は既に冬である。7月に上陸したときには30糧位であつた高粱は稔つて刈り取られ、滿目荒涼たる滿洲の荒野で戦闘は開始されたのである。第1軍は本溪湖方面で非常の苦戦に陥つたが、閑院宮殿下の御統率になつて居た騎兵旅團の奮戦によつて之れを挽回し、勝利の曙光を認め、第4軍は12日三塊石山に大夜襲を試みて功を奏し、第2軍も戦ひ進陟したが、奉天迄敵を撃退するを得なかつた。沙河をさしはさんで冬營すること

になつて第4軍司令部は13日凄惨たる三塊石山の戦場に到着し、寺院内に宿り、翌日山を下つて北麓の大勾に翌年2月28日迄滞陣した。

寒くなつた。水分は凍る寒い時になつたのに、私は未だ夏服で居た。それは原隊から冬服を送つて来ることになつて居たのに、まだ送つて来ない。11月2日に軍曹に進級して軍司令部の各部に挨拶に行つたところ、皆々が「未だ冬服を着て居ないではないか」と大に同情して下さつた。餘り冬服が来ないので軍の管理部でも氣の毒がつて11月29日に特別を以て冬服を支給された。

防寒用としての外套は襟のところに毛皮があつて服地は柔かである。水に濡れるとボタボタして駄目だが、寒さにはよくたへる。黒外套は雨にはよいが寒さを防ぐにはよくない。水にぬらして凍らすと、ボキボキと折れて仕舞ふ。内側を毛皮で作つた胴着、これは暖い。普通の襦袢、袴下の上に毛メリヤスの襦袢と袴下とを着、靴下も毛メリヤスのものが與へられ、毛メリヤスの手袋、その上に大手袋を用ひ、毛メリヤスの頭巾、これは目だけを出し、頭の上からスポーツ首根までである。或る時防寒服に身を固めて外出し、友人の家で頭巾を脱ぎかけたが、どうしても取れない。口の邊で引つかゝるのである。鼻いきが口ひげと頭巾とに凍りついて居たので、暫く火にあたゝまつたらとれた。

此様なことは内地の人には想像にも及ばないことである。牛や馬の涎がつらゝとなつて下つて居るのも異なものである。酒も油も凍る。鶏卵をガラガラと石の上に轉しても凍つて居るから大丈夫だ。魚も凍れば蜜柑や梨もあたゝめなければ食へない。或人が牛肉を切つて居るのを見たら赤白色だ。白色は水分が凍つて居るのである。水氣といふ水氣は總べて凍るのであるから實に驚くべしだ。

滿洲の土地は土砂に乏しいから、一度雨が降ると道路は泥濘膝を沒するので交通不便であるが、冬になれば土地の水も河水も總べて氷結するから身に防寒の準備さへ十分にしていれば交通上却つて便利だ。只井戸水は地下數米にあるので地熱の爲めに凍らない。井戸水が凍結したら滿洲には人は住めないことになるが、天の配劑は實に微妙なものである。井戸側は凍り。流した

水は無論凍る。井戸側は凍り、又凍り漸く釣瓶を上下し得る丈になる。空元気で防寒の用意を十分にせずに出外して、口ひげが凍り、手を當てたらボロリと落ちたといふ話を聞いた。凍傷にかゝるのは尖端からだ。鼻の先、耳、指先が第一に犯され易いから、摩擦し又は運動させないと血液の循環が止つて凍傷に罹るものである。

明治38年1月下旬滿洲軍の左翼には秋山騎兵旅團が粗散な騎慕を張つて居たところへ敵將ミシエンコが數萬の騎兵を以て逆襲して來たので、大山總司令官は沙河會戰の際到着したところの、我國で最後に動員された第8師團を之れに向けた。弘前師團は寒國で養成された強い師團で、寒さには能く堪へるであらう各師團とも度々戰闘に参加して偉勳を樹てゐるのに弘前師團は沙河會戰の終り頃に到着したので未だ一度も戰場に出て居ないから立見師團長を始め一同勇氣が充満して居たところである。臨時立見軍が編成され第8師團を根幹とし之れに他の師團や後備旅團が加はつて零下二三十度の時、數日活動し、數倍の敵を見事撃退して東北男子の武勇を現はしたのであるが、寒氣酷烈であつたために多くの凍傷患者を生じた。

靴下を4枚も5枚もはいて靴の中で指先の運動が出来なかつたものは凍傷に罹り、2枚位しかはいて居ないで能く足先の運動が出来たものは却つて凍傷に罹らなかつたのである。黑溝臺の激戰は實に嚴寒の眞最中に行はれたのである。一時は滿洲軍全體の戰闘になるかもしれない豫想されて居たが、餘り寒いので大部隊の行動には不可であるといふので少し寒さが和ぐのを待つて、2月の中旬から鴨綠江軍が行動を起し、清河城を陥れ、馬群丹に迫り、第1, 4, 2, 3軍が之れに策應して2月27日頃から全軍進撃、渾河の氷の解けない内に、歩工兵は無論のこと、騎砲兵も安々と氷上を進軍し大勝利を得たのである。私が渾河の氷上を渡つたのは3月11日であつた。3月9日には大風沙塵を巻き、南風であつたので、10日には暖かく奉天城を左に眺め渾河南岸の小石厠にかりの夢を結び翌日渾河の氷上に達したときは氷が解けかけて處々危険なところもあつて、所謂危機一髪の所で、我が全軍は氷上を通過したのである。

1月氣溫の最低の平均は次の通りである。

大	連	零下16.2度
山	形	零下12.0度
奉	天	零下27.2度
旭	川	零下29.9度
岡	山	零下4.6度

滿洲は寒いから雪が澤山積む様に思つて居る人が多いが、寒いけれども土地が乾燥して濕氣の少いところであるから積雪10糎に及ぶことは稀れである。我が國の日本海沿岸は世界に於ける有名な積雪の多い地方であるが、1月の平均温度金澤は2.5度、高田0.7度、新潟1.4度、山形零下1.6度、函館零下3.0度である。これ蒸發多き對馬海流と北西季節風の影響によるものである。

5. 4月, 5月, 6月——滿洲の春

3月の中旬から河氷は解け始め、4月の終り迄には滿洲も冬が終り、5月になつて初めて春らしくなり、梅も櫻も桃も杏も一度に花を開くが、この頃、風が多く、あわたしく春が過ぎ、6月には年中の好時節となるのである。

5月中の平均温度は左の通りである。

大	連	15.2度
山	形	14.3度
奉	天	15.8度
旭	川	10.1度
岡	山	17.3度

む す び

滿洲の陣中生活1ヶ年半に體驗したところの氣候に就いて略述した。これで滿洲の冬が如何に寒く、夏が暑い大陸性の氣候であることがお判りになれば、目下滿洲に於ける我が將兵が、無形の敵——嚴寒に對して如何に苦しんで居るか同情されることゝ思考するのである。（昭和6年12月11日稿）

(火星の接近参照文献)	1922年(大正11年)の接近	「天界」第19號, 第115頁
	1924年(大正13年)の接近	同 第38號, 第69頁
	1926年(大正15年)の接近	同 第67號, 第395頁
	1928年(昭和3年)の接近	同 第93號, 第44頁
	1931年(昭和6年)の接近	同 第117號, 第86頁
	その他	山本博士著「火星の研究」